第24回 『教行信証』に学ぶ会 講師：延塚知道先生 【ライブ版】

2023（令和5）年10月12日　会場 円徳寺

講題 :『教行信証』信巻 「三一問答」への助走 曇鸞・善導

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

　こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。
大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。
　自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を発さん。
　自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。
　自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。
無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

　こんにちは。申し上げたいことがいくつかございまして、最初は、先ほどちょっとご紹介いただきましたが、個人的なことで大変恐縮ですけども、家内の四十九日をこの間の日曜日に勤めました。まあ、四十九日まではと、きっと思っていたのでしょう。終わったら少し疲れが出て、なにかこう、つっかい棒がなくなったようなそんな気がしております。まあ、寂しいというのではなくて、なんかこう、ちょっと張り合いがなくなった。そんな感じがします。家内がおれば、「一生懸命おいしいものを作ろう」と思って作っておりましたけれども、一人になると「面倒くさいなあ」というふうなことで、「人間は何で三度三度飯を食のかな」と思って（笑）、面倒くさい奴やなあと思っておりますが、お通夜、葬儀にお参りくださった方がたくさんいらっしゃって、この会からもたくさん御香資をいただきました。けども、会でいただいたのをよく見ると、ご住所をお書きになっていない方が多くて、いろいろまあ娘と相談したのですけど、学習会としていただいたと理解させていただいて、学習会の方にまあちょっとでもと思って、今日はお菓子を少しですが、恥ずかしい話しですけども、御香資をくださった方もくださらなかった方も供養と思って一つくらい食べていただければありがたいと思います。
　振り返って見ますと、この半年間、家内がもう助からんと決まってから半年家におりました。その間まあいろんな話をして、毎日食事の後に私と話をするのが家内の唯一の楽しみで、「寝たくな

い」と言うことが多かったのですけども、よく考えますと、話していた内容は、政治とか経済とか、そういうような馬鹿話はしてましたけども、そういうのじゃなくて、やっぱり人間の関係、それが最後に残るのだと思います。こんな方と遇ってお友達になってうれしかったとか、お電話を頂いてうれしかったとか、なんかそんなことばっかりを言っておりました。ですから最後にはまあ人間関係、これが財産で、そして優しくしていただいた、ありがたかった。それだけでなんかうれしそうな顔をして、私はもうそれで十分なのだと、こういう口ぶりでしたので、なにかみなさん方、ご香資もたくさん下さって、家内は多分喜んでいると思います。十分ではありませんが、意を汲んで一つでもいただいていただいたらありがたいと思います。

それからもう一つは、田畑先生にもう５年経ったぞと、こう言われまして、大変恐縮であります。振り返ってみると、まだ信の巻に入ったばっかりですから、教・行・信、信の巻が終われば、これは「行信半学」と言って、昔から真宗学は行の巻、信の巻が終われば、あとはもう半分以上終わったようなものだと、こう言うことで、まあ肩の荷が降りますけれども、「もう５年経ってしまった」と言われまして、(会場から :「５年目です」)、「５年目」ですか、申し訳ない。まあこんなことを言って大変恐縮ですけども、田畑先生がお布施を下さるのです。先生の財布の金を減らしているような気がして申し訳ないなあと思って、正直に言いますと、ここは、私全国で『教行信証』の会を持っておりますが、一番力が入る会です。それは皆さんがよく聞いてくださると同時に、やっぱり田畑先生の僧伽（サンガ)、これが大きいのだというふうに思ってます。ですからまあ５年でと言うなら、あとは、私が金を出すからこっちでしゃべらせてくれと（笑)、是非ここで続きをしゃべらせてくれと申し上げたいくらいの、まあ私のホームグランドになっておりますので、先生とご相談して、先生に余りご迷惑をかけないようにして続けさせていただいたらありがたいと思います。

それで、この間は、えらい熱が入って、ちょっと圧倒されましたと言われましたので、確かにそうだなあと思いますが、今までの真宗学の参考書をお読みいただいたらわかると思いますが、道綽の三不三信について言及している書物は皆無です。一冊もないのです。それは親鸞聖人が「正信偈」で、道綽の三不三信の誨（おしえ）は実に慇懃（おんごん)、丁寧で、「慇懃」という言葉を使うのは、あの道綽の三不三信の誨と、もう一つは『教行信証』の証の巻の結釈で、曇鸞の、

「ねんごろ（慇懃）に他利利他の深義を弘宣したまえり」（慇懃弘宣他利利他深義）

（東聖典２９８、西３３５、島１２－１３５）

と、こういう言葉遣いなのです。その二か所しかないのです。他利利他の深義も引用をしていますけれども、それがどのように慇懃だったのかということはよくわからない。まして道綽の三不三信の誨は『教行信証』、和文のどこにも引用がない。「正信偈」にただそうおっしゃっているだけで、どこにもないために、なぜ大切なのか、どういうふうに慇懃なのか、それはわからない。表向きには。そのために、これまでの真宗学の参考書、その他、道綽の三不三信に触れているところは皆無と言っていいわけです。

ところが法然の全集を何度も読みますと、不思議なことに法然の『選択集』を見ると親鸞のように浄土の系統が七祖というふうに決定しているわけではありません。『選択集』では二つの系統が載せられていて、今ちょっと忘れていて正確ではありませんが、もし正確に知りたいのなら『選択集』を帰って読んでごらん、法照、少康そのへんも入っていたような気がします（懐感、少康）(『選択集』二門章、西・浄土真宗聖典七祖篇１１９１)。

ところが法然の講義をよく読むと、盛んに出てくるのが道綽です。道綽の「三不三信の誨」、こ

れが何度も何度も繰り返して出てくる。ということは、親鸞が法然門下で勉強したときに、耳にたこができるほど聞いたのが道綽の三不三信の誨なのです。しかもその三不三信の誨をもとにして、もう一人出てくるのは源信です。法然が盛んに褒める。「源信は偉い、源信を読め」。こう言って源信を盛んに褒めます。そして今『法然全集』の中に法然の講義が四つ残っています。その四つの講義の一番最後のところに、これはどれもですが、源信がなぜ偉いかと言うと、道綽の三不三信の誨の、三不信の方は善導が雑行として継承した。そうですね、三不信というのは自力だから。不淳、不一、不相続。ですからこれは自力を表しているわけですから、こちら側は不淳、不一、不相続。私たちが初めて南無阿弥陀仏の教えに頭が下がった時に、この大きな仏様の世界にある、こちら（淳心、一心、相続心）が法ですね。大きな仏様の世界にあるというふうに目覚めると同時に、わが身はいかに愚かか、いつでも私というものに執着して、いつでも私というものを立てて、どうしても私というものを捨てることができない。仏様に背いているというしかない。ですからこちら側（不淳・・）は、三不三信の誨は善導大師のところにいくと機の深心・法の深心として継承されていくわけです。けれども、今申し上げているのは法然がおっしゃっているのですが、源信という人は偉い人だと、あの源信は、この不淳、不一、不相続、こちら側を善導大師は雑行として受け取ったのだと、そして、こちら側は（淳心・・）専修念仏として善導大師は受け取ったのだと。だから、この三不三信をもとにして道綽と善導の師資相承があると見抜いたのは源信なのだと、だから源信は偉いと言って、法然の講義の四冊とも最後にはそれがちゃんと書かれています。それだけではなくて、他のところにも源信は偉いと、源信は道綽の三不三信の誨を、善導大師が雑行と専修念仏として、行として継承したのだと、そこに道綽と善導の師資相承があるとこう言ったわけです。
そうすると師資相承というのはわかるでしょう。師資相承というのは、これは道綽の立脚地、道綽の信心そのものであると。善導大師もこの信心に立って、それを行として引き受けたのだと、こういうふうに言っているわけです。それが法然の講義の中に何度も何度も繰り返して出てきます。

ですから親鸞聖人が若い頃は、法然門下で、私が松原先生の教を聞いたのと一緒で、ともかく「本願の成就では」と言って、何があっても本願成就文を講義していました。もう耳にたこができるほど、私たちは身に沁みついています。と同じくらいに親鸞は、この三不三信の誨と、源信のこのどう言ったらいいか、見抜きですね、道綽と善導との師資相承を見抜いている源信のまなざし。それがどれほど素晴らしいかということを、法然からもういやと言うほど聞いているわけです。

そうするといいですか、道綽・善導・源信・源空、下四祖、これで決まりでしょう。これで決まるでしょう。そして上三祖は龍樹・天親・曇鸞、これはこれまで皆さんと一緒に拝読してきましたが、行の巻に龍樹・天親・曇鸞とありましたね、しかし、あれは親鸞ももちろん『大経』の祖師たちとして継承した。当然のことです。しかしそのまなざしは、実は『論註』にあるのですよと言って、親鸞は自分の手柄というよりも、私はこの曇鸞の、今日お話をしますけれども　曇鸞の「名号に帰依する」、ここに私の立脚地があるのだから、曇鸞が見抜いたように、龍樹・天親・曇鸞、これは曇鸞の功績として、私は上三祖を仰ぎますという、こういう印象が強いのです。だから上三祖は曇鸞大師のまなざしをそのままいただいた。それから下四祖、道綽・善導・源信・源空、これは法然の教えによって決定する。

そうすると決定するのは、何と言っても、道綽の三不三信の誨が元になって、道綽・善導・源信・源空が決まっていくわけです。師資相承が決まるというのは、これは立脚地ですから、道綽が立っていた信心、これはどちらかと言うと『大経』の信心なのです。『安楽集』は『観経』の註釈書であ

っても、道綽が立っていた信心は、内から突き上げてくる内因の信心、わかりますね。皆さんのいのちそのものが、時機をえて南無阿弥陀仏として私のいのちを貫いた。もちろん身は凡夫だけれども、この凡夫と異質な信心が私の中から、私を貫いたのだと。だから私を救ったのは信心だと言ってもいい。起こった信心によって、私たちは救われていく、もちろん信心と言っても行信ですから、南無阿弥陀仏、それによって救われていくのだというふうに、『大経』は中から私たちを貫く、信心が。そして私を救う。法蔵菩薩が名乗りを上げて、「この凡夫を救うのだ」と。これが『大経』の内因と法然が言っている。内因としての信心。そこに立ってわかるように解説しますよと。こちら（不淳・・）側は機の法です。だから、自力無効、機の深信ですよ。こちら（淳心・・）側は法の深信ですよというふうに、私たちの分別に合わせて、内因の信心を分別に合わせて解説していくのが『観経』の役目ですから、だから二種深信になると解説になっていく。そういうふうに皆さん方もよく理解しておいてほしい。つまり解説としてよく理解はできる。だから皆さん勉強する時によく理解できるように勉強するでしょう。しかしはっきり言います。理解して勉強しても救われません。なんか絵に画いた餅みたいで、勉強すればするほど賢くなります。けど、救われません、そういうことでは。そうではなくて、この私たちのいのちが南無阿弥陀仏という名乗りをあげるのだと。法蔵菩薩が南無阿弥陀仏として名乗りをあげて、この凡夫を救うのだと。そういう中から、この私たちを突き破ってくるような信心、それが私たちの救いになるのだと。

だから道綽だって法然だって親鸞だって全部その信心に立っている。だから師資相承と言う時に、ここが立脚地に決まっているわけです。親鸞もここが立脚地に決まっている。そして善導大師もここを立脚地にして専修念仏と雑行と、こういうふうに行として受け取ったのだということが法然のものを読むと何度も出てくる。よく親鸞のものを読むと、親鸞のものの中ではむしろ道綽と源信の方がわかりにくい。七祖の中で道綽という方は善導大師の陰に隠れて、もうひとつわかりにくい。源信は偉い人だけど、あれは浄土の祖師なのかわかりにくい。けど、ちゃんと親鸞聖人はそれをわかっておられて、当たり前の話だけれども、例えば、三一問答と、それから三経一異の問答の前には源信の『往生要集』の文章を引いてきている。なぜですか、そんなことを言及している人は一人もいない。これは大事です。なぜ源信の文章を引いてくるのか。

親鸞の教学は、法然、善導をくぐって『大経』に帰って行った方だけれども、凡夫というところは徹底的に放さない。そして善導大師までは、いいですか、善導大師までは専修念仏か雑行か。専修念仏であれば必ず救われますよ。ところが雑行、これは万に一人も救われない。自力だから。だから聖道門では万に一人も救われない。もし救われたらまぐれ当たりです。というふうに行についての規定。これは善導大師までしているわけです。ところが、みなさん源信の親鸞聖人が引いている歌をご存知でしょう。

「大悲ものうきことなくて　つねにわが身をてらすなり」

（「高僧和讃」、東聖典４９８、西５９５、島１１－３０）

と。けれども身が凡夫だから、大悲が照らしているけれども、凡夫だからなかなかいただけないのだと。あれは行についての規定ではないでしょう。つまり専修念仏をしていても、している人間が煩悩具足だから、行はいくら専修念仏であっても、それを称えている人間の方、それはどうなっているのか、というふうに目を向けた人が源信です。だから源信は念仏を称えても「大悲ものうきことなくて　つねにわが身をてらす」と。だけども自分は煩悩具足の凡夫だから見えないのだと、こう言うでしょう。あれは行が専修念仏であったとしても、称えている私が凡夫だからだというふう

に、行の規定をはるかに越えて、今度は行を称えている人間の規定にまでいくわけです。そこに源信の偉いところがある。それを親鸞は引き受けて、そして行は当然他力の念仏ですよ。だけど称えている人間が自力だ。十九願の自力の人もいる。二十願の自力の人もおる。そして十八願の他力というところに帰った人もおる。というふうに機を規定していくでしょう。あれは源信のまなざしによります。源信が偉いから。源信に至るまで、機を明確に規定していった人はいない。だから源信にまで来て、たとえ念仏が専修念仏であったとしても、私たちは専修念仏であったとしても、この機がどうにも自力だから、専修念仏にならないのだと。この機が専修念仏にしないのだと。もともと法として言えば専修念仏。念仏は如来の名乗りなのだから、それは真実に決まっている。ところがその真実をどうしても受け取れない人間の方が、この機が問題なのだと言って泣いた人が源信です。

親鸞はそれをちゃんと受け止めて、十九願の自力、二十願の自力、そして十八願に頭を下げる。こういうふうにはっきりと機の方の規定にまで踏み込んで教学を立てていく。三三の法門というのが親鸞の最終的な結着どころですね。三願、十九・二十・十八、十九願は『観経』、二十願は『阿弥陀経』、十八願は『大経』。『大経』の機は正定聚の機、二十願の『阿弥陀経』の機は邪定聚の機、そして『観経』の十九願は不定聚の機というふうに、三つにきちっと分けて表に作って親鸞の教学が掲げられるでしょう。あの教学が徹底的にきちっと決まるためには、今言った七祖の教学と源信が大きいい。そんなふうにして、親鸞が勝手に立てたのではなくて、七祖の教えをひとつひとつ吟味し、教えられていって、そして三三の法門が最終的に立てられていく、こういう形になっています。三三の法門くらい覚えていますか。試験に出しますよ。（笑）一年にいっぺん試験をする。（笑）

申し上げていることわかりますね。そんなふうにして七祖の方々の教えを受けながら、最終的に親鸞の教学が決定されていくわけです。そのときに大きいのは、みんな大きい、みんな大切なのだけれども、法然から決定的に教えられるのは道綽と源信です。ところが今言ったように源信の三不三信の誨がどこにもないために、この間私が一生懸命申し上げた、『文類聚鈔』の表紙の裏に、この間言ったように三不三信の誨が書き込まれている。あれは法然の教えそのままです。そして見たらわかるように、『文類聚鈔』は教、行、信、証と終わると今度は己証、自分の立脚地を展開する。そこには、三一問答と三経一異の問答がある。説明なく展開されていくから、これを見たらわかるでしょう、一心の内容は凡夫であるという自覚と、この凡夫のまま法に包まれた。こちら側（不淳・・）は『観経』、そして至誠心、深心、回向発願心、これに当たる。こちら側（淳心・・）は至心・信楽・欲生、この『大経』の三心に当たる。こちら側（不淳・・）は『観経』、こちら側（淳心・・）は『大経』、つまり法を表す。だから一心の内容は凡夫であるということと同時に、法蔵菩薩が至心・信楽・欲生の願心によって立ち上がって私たち救った。こういう信心を世親菩薩は、「一心帰命」と教えてくださった。だから一心という信心の内容は、凡夫であるということと大涅槃の法を開くということ。この二つが一心の内容になるわけです。これはおわかりですね。

今日私がくどくど説明しているのは、今日これから皆さんと拝読するところを見たらすぐにわかります。一番最初に、『論註』の不淳・不一、不相続が出てきます。信の巻の経文引証が終わりますと、行の巻は龍樹からでしたね、ところが信の巻はいきなり『論註』からです。

「**『論の註』に曰わく**」（東聖典２１３、西２１４、島１２－５７）

せっかくですから、今日ここは拝読しますから、皆さんと読んでみますか、２１３ページになります。ここまでは（東聖典２１２～）『大経』の十八願、『無量寿如来会』の十八願、『大経』の成就

文、『無量寿如来会』の成就文、そしてそのあとは、これは大事なのですが、『大経』の「東方偈」の真の仏弟子のところが引かれる。そしてその１１、１２（科文番号）というところも、これは『如来会』の真の仏弟子のところです。だから本願が成就したらどうなるかと言えば、真の仏弟子になる。こう言っているわけです。ところが真の仏弟子と言うのは、ここでも何度も申し上げたと思いますが、大乗仏教の常識からすると、真の仏弟子というと菩薩道の八地以上の菩薩のことです。つまり弥勒以上の人たち、これが真の仏弟子です。わかりますね。ですから、大乗の思想界にこの『教行信証』を提出しているわけですから、あなたたちの真の仏弟子というと、八地以上の弥勒以上の人たちを真の仏弟子と言うでしょうと。ところが『大経』ではそうではなくて凡夫なのですと。そして「我が善（よ）き親友（しんぬ）ぞ」と世尊がほめてくれるのですと。それが凡夫ですと、凡夫が真の仏弟子になるのだというのが、この『大経』下巻の「東方偈」（東聖典５０～５１）から引用しているところです。わかりますね。（参、「正像末和讃」東聖典５０５－５７）

「（大経）また言わく、法を聞きてよく忘れず、見て敬い得て大きに慶ばば、すなわち我が善き親友なり」（東聖典２１２、西２１３、島１２－５７）

これです。これは覚りを悟ったと言っていない。凡夫が『大経』の本願の教えを聞いて、そしてそれを身にいただいて、教えてくださった先生を敬い、おおきに慶ぶ、踊躍歓喜する。そうすると凡夫の身のままで、「我が善き親友」と世尊がほめてくれるのだと。こういうものが『大経』の真の仏弟子なのですよということを、親鸞はあえてこういうことを言って、きちっと押さえているわけです。親鸞という人は偉い人でしょう。

よくわかるでしょう。私たちは常識として、「凡夫だ、凡夫だ」と頭からそう思うけれども、これは大乗の仏教に提出しているのだから、だから覚りを悟ったのではないのだと、本願が成就したのだと。本願が成就したというのは涅槃を頂いたのだと。あなたたちは覚りを悟ったと言うかもしれないけど、私たちは信心として頂いたのだと。身は凡夫だから「わが善き親友だ」とお釈迦様が褒めてくれる。そういう意味で真の仏弟子なのだと。皆さんここよく知っておいてくださいよ。これは僕は耳にたこができるほど聞いたのです、松原祐善先生に。僕は皆さんと同じように寝ていた、こうして。そうするとすぐに机をたたく（机をたたく）、「我が善き親友ぞと、教主（机をたたく）世尊なほめたもうじゃ！」といつも言っていました。つまり、お釈迦様から褒めてもらうのだと、「悟った」と書いてない。凡夫のまま信心を頂いたのだと、それをお釈迦様が褒めてくださる。これが私たちの『大経』による真の仏弟子なのですよということをちゃんと押さえている。親鸞立派でしょう。そして『如来会』の真の仏弟子、これをちゃんと押さえているわけです。僕は教養があるためにすぐに時間を取ってしまうから、田畑先生から怒られるのですが、どうも反省をすると、僕は教養があるためだと思う。（笑）あのね、この『如来会』の真の仏弟子を説いているところの１２という文章の最初から５行目のところに、

「**当にもろもろの聖尊に重愛せらるることを獲べし。**」（東聖典２１３、西２１４、島１２－５７）

これが今言う教主世尊にほめられるということですね。その前の、

「**かくのごときの深妙の法を聞くことを得**ば、」

聞法によって、信心を頂けば、まさにもろもろの聖尊、諸仏に褒められる。「我が善き親友ぞ」と言われる者になっていくのだ。これが『大経』と一緒のところです。その後に、

「**如来の勝智、遍虚空の所説義言は、ただ仏のみ悟りたまえり。このゆえに博く諸智士を聞きて、我が教如実の言を信ずべし。**」

こういう言葉がありますね。これは親鸞が読み変えているのです。だから「如来の勝智、遍虚空の所説義言」、何のことかよくわからないでしょう。これはもともとは、こういう文章です。「如来の勝智は、虚空にして遍（あまね）し」、如来の勝れた智慧は空の世界に通達して、そして空の世界で遊んでいる。「所説の義言は」、お説きになったそのお言葉の意味は、だから空の世界に通達して、空に世界で遊んでいるのだから、だから、「ただ仏のみ悟るなり」。こう読むわけです。実にお釈迦様の教えを解説する時には、こう読むとわかりやすいでしょう。お釈迦様の勝れた智慧は空の世界に通達し、空の世界で遊んでいる。だから、

「二乗の測るところにあらず。唯仏のみ独り明らかに了（さと）りたまえり。」

（『大経』下巻「東方偈」、東聖典５０）

二乗がわかるわけはないと書いてある、『大経』に。そのように、ただ仏のみが悟っておられるのだ。だからお釈迦様は偉いでしょうと、こういう意味なのです。そしてそれに続けて、

「このゆえに博く諸智土を聞きて」、だから、ひろく浄土の教えを聞いて、

「我が教如実の言を信ずべし。」

私の教えは如実の言、如実の言というと名号、「名号を信じなさい」と、こういう意味なのです。

ですから、これはお釈迦様の勝れた徳を褒めている言葉なのですが、親鸞はこれを名号の内容にします。「如来の勝智」、如来の智慧は優れている。そして空の覚りを悟っている。ですから説いている名号の意味は仏だけがわかっている。だから博く浄土の教えを聞いて、私たちのために「名号ひとつを信ずべし」とこう言ってくれたのだと。こうなると「如来の勝智、遍虚空の所説義言」というのは、これは名号に含まれている、名号の中に包まれている意味になってくるわけです。単なるお釈迦様の徳を褒めているというのではなくて、名号というものは空の覚りを私たちに教えてくれるから、だから信じなさいと、こう言っているのだと。こういうふうに実は、ここは読み変えているわけです。

ああそうか、ややこしいことをあいつは言うなと思うかもしれないが、そういう読み変えが実に見事なわけです。私は教養があるために、そういうことをいっぱい知っているので、時間をとるのですが、もうひとつ教養ついでに（笑）申し上げると、４３３ページを開けてください。『愚禿鈔』、今必要なところだけを申し上げます。今言った『如来会』の文章を一般の読み方でなくて、親鸞が読み変えた文章としてそこに引用しています。

「如来の勝智遍虚空の所説義言は、ただ仏のみの悟なり、このゆえに博く諸智土を聞きて、我が教如実の言を信ずべし」と。（『愚禿鈔』、東聖典４３３、西５１４、島１４－１１）

こうなると完全に名号を信じなさいと、こういう教えになるでしょう。そして名号をなぜ信じなさいと言ったかというと、実は空の覚りに通達している。「所説義言」というのは、これは八万四千の法門という意味ですよ。お釈迦様が八万四千の法門を説いたね。その法門は全部名号ひとつに納まるのだと、こう言っているわけです。そういうふうにこの文章を読んでいるのです。というのはさっき説明しましたね。そしてこの文章は、ここも見たらわかるでしょう。前の文章、これは、

「我が滅度の後をもって、また疑惑を生ずることを得ることなかれ。当来の世に経道滅尽せんに、我慈悲哀愍をもって特にこの経を留めて、止住すること百歳せん。」

これは『大経』の一番最後の「特留章」の文章です。つまり阿難に「この名号ひとつを信じて、持って生きなさい、この名号ひとつを人に広めなさい」とこう言って、そしてこの名号を説いた『大経』は末法になっても消えませんよと。この『大経』だけは百歳、百歳というのは満を表すのです

から、百年という意味ではなくて、「末法になっても永遠に消えないのが『大経』の名号の教えだから、名号ひとつを阿難、あなたは広めなさい」というところに並べている。ということは、この文章は、実は、「名号ひとつを信じろ」というお釈迦様の遺言だと言っている、親鸞は。遺言なわけでしょう。私が死んでもこの『大経』だけは死なないのだと。百年にとどまらないのだと。だから『大経』の名号を、阿難あなたは、皆に説いて聞かせなさいと言って『大経』は終わるわけです。それと並べている、この文章をね。つまりこの文章はお釈迦様が命がけで阿難に名号を付属した遺言の言葉なのだと、こう言っているわけです。わかるでしょう、読んだらね。そう言うことが、まあ言えば僕の教養なわけです。（笑）つまり素晴らしい文章だと思いませんか。これをすっと読んでいるだけではわからないでしょう。ところがいっぱい読んでいるから、「おっ、この文章あすこにある」、見ると、おっ遺言だと言っている。「名号ひとつを称えろ」と、阿難に言ってる文章と並べている。そうすると、「これは名号を表している文章だ」と読まないと親鸞の意図にかなわない。

そうすると今言ったように、一般的な読み方をすると、これはお釈迦様を単に褒めている言葉になってしまうけれども、そうではなくてお釈迦様の智慧は空に通達している。そしてその空に通達して教えを八万四千の法門として説いた。その八万四千の法門として説いた「所説の義言」、これは全部名号ひとつに納まっている。だから最後に「如実の言を信ずべし」とお釈迦様は言ったのだと、こう親鸞が読んだことになります。わかりますね、言っていること。もうちょっと感動しなさいよ。所説の義、お釈迦様が八万四千の法門を説いた。その八万四千の法門の意義は仏さんしかわからないけれども、それは如実の言ひとつに窮まると、こういう文章に親鸞が読んだことになります。だから「如実の言を信ずべし」とお釈迦様がおっしゃったのだ。そしてこの文章は、実は「特留章」にお釈迦様が言っている文章と一緒なのだというふうに親鸞が並べているということは、これが釈尊の遺言だと、こう受けとった。こういうことになります。

そう読むとものすごくよくわかるでしょう。なるほど、親鸞は偉いと思いませんか。すっと『如来会』を引用しているだけではないのです。それをまた『愚禿鈔』で引用し直して、そしてこれは遺言よと、お釈迦様の遺言、だから「名号ひとつ」と阿難に教えている文章と同じ意味よと指示しているわけです。そう読まないといけないですね。そしてこういう読み方に読み変えた。そして八万四千の法門は全部名号ひとつに納まる。だから「如実の言を信じよ」と、お釈迦様は命がけで言ってくださったのだと、こう言っていることになります。素晴らしいと思いませんか。

だから、あなたたちは覚りを悟るというようなことを言っているけれども、煩悩具足の凡夫で本願が成就する信心、それに覚りを頂く。これが八万四千の法門が全部納まるのだと。だから、あなた方もっと頑張って自力無効がわかるまで修行しなさいと、こう言っているわけです。そういう文章がここにずっと並べられていくわけです。経典の最後の方は真の仏弟子のところで並べられていくわけです。そして、それを受けて本願の成就というのは、今言ったようにお釈迦様から「我がよき親友」と褒められる凡夫なのですと。八地以上の菩薩とは違うのですと。だから曇鸞大師は『論註』で「名号に帰した信心を三不信」と表明したのですと、いうふうに曇鸞大師が出てきます。ここを皆さんと今日は読まなくてはなりませんから、ちょっと読んでみましょうか。２１３ページの終わりから５行目、

「『論の註』に曰く、「かの如来の名（みな）を称し、かの如来の光明智相のごとく、かの名義のごとく、実のごとく修行し相応せんと欲（おも）うがゆえに」（『浄土論』）といえりと。」

（東聖典２１３、西２１４、島１２－５７）

これは皆さんご存知のように、世親菩薩の『浄土論』の文章です。「かの如来の名を称し」、これはわかるね、南無阿弥陀仏とみ名を称える。その時に「かの如来の光明智相のごとく」と、こう言うのですから、いいですか、名を称えるときに「ああ一凡夫だと照らされた」と、こう言って頭を下げる人もおれば、頭をあげて「はあ、そう」と言っている人のおるね。だから世親はちゃんと如来のみ名を称えて、「光明智相のごとく」というのは、こちらが凡夫であることを徹底的に照らされて、そして凡夫こそ救うというのが名の意義です。この法蔵菩薩の名の意義のように、「実のごとく修行して相応せんと欲うがゆえにと」こう世親が教えてくださった。まず、これだけ。

それで、この辺もちょっと感動してもらわないといけのですが、先程、田畑先生が「『論註』を読み始めて楽しんだ」とおっしゃってくださった。「『論註』は大事だ」とおっしゃってくださったのですが、この「名を称える」というところに、「如実修行」という言葉が出てくるわけです。皆さんはあんまり勉強していないから、この意味がわかりにくいなあと思うかもしれませんが、この「如実修行」というのは、これは覚りを悟るということです。五念門でいえば礼拝、讃嘆、作願、観察回向。そして作願、観察のところに止観行が実現するのですから、この作願、観察のところ如実修行という言葉が出てくるならわかります。そうですね。菩薩行の六波羅蜜の行でも布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧。この禅定、智慧のところが止観行になるわけです。だから、最後の止観行のところで菩薩が悟るのだと、止観行というので悟るわけです。だから五念門も止観行ということから言えば、作願、観察、これを止観行にあてていますから、世親菩薩は菩薩ですからね、世親がこの止観行のところで覚りを悟ったのだと、こう言うので、この止観行がこの作願、観察に出てくるのならわかるわけです。ところがここは讃嘆門に出てくるわけです。「名を称える」というところに、「如実修行」という言葉がね。

「如実修行」というのは『論註』にも出てきます。２８８ページ開けてください。ここは菩薩が浄土に生まれて菩薩になって、菩薩がこの娑婆で教化をするというところが菩薩荘厳ですね。その菩薩荘厳のところに、まず２８８ページの２行目、読みますよ、

「いかんが菩薩の荘厳功徳成就を観察する。菩薩の荘厳功徳成就を観察せば、かの菩薩を感ずるに、四種の正修行功徳成就したまえることありと、知るべし」（論）。

（東聖典２８８、西３１８、島１２－１２５）

要するに覚りを悟ったからだと、こういう意味です。四種類菩薩荘厳が説かれるのですが、この四種類は、四種類の教化をするというのではなくて、悟った覚りを四種類表現しているだけだから、だから元はひとつよと、こういうところなのです。そして、その根拠のところに、ここから、

「真如はこれ諸法の正体なり。」　空の覚りはあらゆるものの本性である。

「体、如にして行ずれば、すなわちこれ不行なり。不行にして行ずるを、如実修行と名づく。」

空を悟った菩薩は、空を悟ったので、空を悟ったその空をそのまま表現する、だから、それは行じたということでもないし、行じないというわけでもない。つまり空を悟った菩薩は、悟った空をそのまま表現するものになるから、いろんなところで表現をしている。だけどそれは本人がそう思ってやっているわけではない。空の覚りがそうさせているのであって、だから空の覚りを悟った菩薩は四種類のはたらきを表すと、たまたま書いているけども、そうではないというわけよ。わかる、どういうことを言っとるか。そんなことを言い出すとまた長くなるのです。

いやいや、いつか言ったように私はコサミョンという、高史明という人に会いたくてね、本願寺の御遠忌の時に、あの人は自分の息子を亡くして、そして初めてこの親鸞の教えに触れて、まあう

れしかったのでしょうね。だからその本願寺の御遠忌の時に本願寺で講演したときに感動して、そして「念仏よ興（おこ）れ！」と叫んだわけよ。その講演を聞いて、僕は「ああ、この人本物だ」と思って、自分の中から起こってきた南無阿弥陀仏、それがみんなわからんか「念仏称えろ！」、「世界中の人たちに念仏興れ！」と叫んだわけね。「ああ、この人に会いたい」と思っていて、寺川先生にお願いしていたら、寺川先生が「ああ、高さん来ているから会いましょう」と言って会った。まだ僕は三十代だった。若かった三十ちょっとすぎだから、まだピイーピイーだから、偉い先生だから、ちょっと興奮して、これはあかんと思って、まともに飲んでいたらあかん、これは寺川俊昭に高史明だから、ろくな事はないと思ってべろべろに酔いました。（笑）その時に、高さんの話を聞いていて、「ああそうや」と思うことがいっぱいあって、何というか、脳天から断ち割りというか、それでその時に遇った印象が強くて、一生ずっと忘れなかった、僕は。だから会うたびに「先生、初対面の時に私の頭をかち割って、脳天から断ち割りやったじゃないですか」と言うと、「私は先生のことをそんな非難するようなことは一切していません」と言うわけです。「ずっと褒めてたでしょう」と言うけど、僕にしたらほめ殺しよ。つまり、こっちが殺されるのではないかと思うような迫力を感じたわけです。ところが本人は「普通だった」と言うわけです。それそれ、それが本当にわかった人の振る舞いです。怒るつもりでもないし、褒めるつもりでもないけど、聞いた方が、「いやあ、あの時もう初対面で、ばっちりやられて、僕はもう感動しました」と言ったら、「いやいや、私は、先生、そんな怒ったりしていません。何にもしていません」と。だけど、僕は感じたのです。

というふうに菩薩は空の覚りを生きているから、教化しようと思っているわけでもないし、教化せんとこうと思っているわけでもない。生きているままが教化になっている。だから不行でもないし、行ずるでもない。それはつまり空の覚りがひとりでにはたらき出ているのだと。これが如実修行です。だから如実修行というのは、空の覚りを生きているということになります。この空の覚りを生きているという、これが止観行のところに出てくるのなら、菩薩ですからまだわかります。ところが名を称えるというところに出てくる、ここに世親の素晴らしいところがある。つまり、さっき言った「名号を称える」というところが、私たち凡夫ということを教えて、そして名号に目を開くのであって、だから、止観行というふうに菩薩が悟った覚りを表す言葉を、止観行のところではなくて讃嘆門の名を称えるというところに世親が持ってきているということ。これがとんでもないことをしている、世親は。しかしここに目を付けたのが曇鸞です。だから曇鸞はこの讃嘆門の「名を称える」というところに、大涅槃の覚りを頂くのだと世親が言っているでしょうと、世親の言うとおり、ここから名号を註釈をしていくのが曇鸞大師です。

だから、曇鸞大師は讃嘆門を大切にするというのは、今言ったように、世親が指示しているということ。それを知っておいてください。つまり普通、わかるでしょう、普通名を称えるというところに、なんでそんなもの、悟りなんか来るかと、そんな馬鹿なことあるかと、こう言うのが常識ですよね。ところが世親は堂々と、いや、「無碍光如来の名を称する」、それが如実修行なのだと、そして、しかもそこに相応と書いてある。法蔵菩薩の如実修行に私たちが相応するのだと。覚りを悟って、覚りを渡したいと言うのは法蔵菩薩のご苦労。その法蔵菩薩が私たちの信心として名乗りをあげた時に、その法蔵菩薩の修行に凡夫として相応するのだと。相応というのは『論註』のまた違うところに書かれているけど、箱の蓋と箱の底、蓋と底は違うものです。違うものですが、ひとつになって箱になる。如来と凡夫は違うものです。しかし、それが相応という形でひとつになって仏

道になっているのやと言っているのが、この名号釈です。そういう裏にあること、言葉の裏にどういうことがあるかということを知ると、世親て偉いなあと、まず世親が偉い。名を称えるときに如実修行という言葉を持ってくるということは、これは並みの菩薩ではない。そうですね。そしてしかもそこに目をつけて、ここが世親の中心だと読んだのが曇鸞です。だから曇鸞は偉い。しかも「如実修行に相応する」と書いている。この「相応」ということが大事です。法蔵菩薩の覚りを悟った修行に、凡夫として初めて名号を聞いて相応するのだと。それが「光明智相のごとく、名義のごとく」ということだと。わかりますね。智慧があたった、そして法蔵菩薩の意義にかなったのだと。そんなふうにして、私たちは南無阿弥陀仏を称えるときに大涅槃の覚りを頂くのだ。これが世親のまず第一声です。それを曇鸞がここが要だと言って、曇鸞が註釈をしたのが讃嘆門の今からの註釈になります。まあ短いとこですけど、それぐらい大切なところなのですよ。もう、皆さん寝とる暇ないですよ。（笑）本当に。ちょっと休憩しましょう。

質問‥『浄土論』の引用で「かの如来の名を称し、かの如来の光明智相のごとく、かの名義のごとく、実のごとく修行し相応せんと欲うがゆえに」というのを如実修行と言われているのですね。
先生‥実のごとく相応せん。「如実修行相応」と出てくるでしょう、そこに。
質問‥そうですけど、そのあと「如実修行相応」という言葉が出てくるのだけど、でもそこまでまだ行ってないでしょう。
先生‥行っていない、世親がまず言ったから、その文章についてこれから註釈しますよと言うのが曇鸞です。
質問‥如実修行ということ、
先生‥「如実修行相応」と出てくる。
質問‥先ほどから言っていることは、自然ということと関係あるのですか。
先生‥今の質問にはすぐには答えられない。つまり自然という言葉は、親鸞はどういうふうに使っているかというと、「願力自然」ですから、関係あるかというと、関係ないわけではない。けども、すぐにそういう言葉と一緒にすることはできないと僕は思いますから、それを一緒にするためには相当埋めなければならない、間をね。そうでないと神がかりになります。ということ。それで、今西藤君が言っているのは、あなたは原典を読んでないからそういうことを言うのだ。（笑）読まなくてはいけない。だからいつも言っているでしょう。世親の『浄土論』というのは、短いものです。ここのずっとあるでしょう。１３５ページから１４５ページまでたった１０ページしかないでしょう。これをよく読むと、今の文章が出てくるのです、この中に。１４３ページのところ、『浄土論』ですが、ここに善巧摂化章のところに、世親は「**かくのごとく菩薩、奢摩他・毘婆舎那を広略に修行して柔軟心を成就す。**」とあるでしょう。この毘婆舎那というのが止観行なのです。この止観行というのは、作願、観察のことなのですが、この作願、観察の覚りを名号のところに、礼拝門のところに持ってきて言っているわけです。そこが世親のすごいところなのです。何でこんなことを言うのかね、非常識極まりないのだけど、そう言っているわけです。そして先程西藤君が言っていた文章、この『浄土論』をよく読んでごらん、捜すだけでも勉強になるから、捜しなさい。八万四千は君が正しかった。申し訳なかった、ちょっと休憩しましょう。（休憩）

講義 2

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏。

難しいことばかり言ってたいへん恐縮です。けど、仏法を聞くのは大事です。家内が元気な時は、「何で、私だけがこんな病気で死ぬのか」と言って号泣したことが何度もあった。それはしょうがないから「よしよし」と言って、泣かしてそして少しずつ話をする。そういうことが何回もあって、そしたら、しまいに家内もだんだんわかって来て、「私のような、仏教がわからないものでも、親鸞聖人はちゃんと包んでくださっていて、そして『観経』はわからない人でも、仏様が迎えにくる」と。「だから、お前わからんでもいい、だんだん泣く元気もなくなってくるから、ボーとなってきたら、仏様の方が近づいて来てくださる。だから心配するな」と言ったら、その通りだったです。やはり、亡くなる一日前でしたが、亡くなる人は一日か二日前に一回元気になると言いますね。そうですね。今から考えるとそれだったのかなと思うのだけど、朝起きて８時なのに、まだ寝ているのです。行って額に手をあてて「おい大丈夫か、生きているか」と言ったら、はっと目を開けて「あ、もう朝なの」と言った。その時は、頭がもうはたらいていなかったと思う。けど、赤ちゃんみたいな顔をしていました。「もう朝なの」と言うから、「もう朝だよ」と言ったら、「よう寝たわ、今日はものすごく楽だ、うれしい」というから、窓を全部開けて「どうや気持ちいいか」と言うと「うん、気持ちいい。ありがたいわ、うれしい」と言って、「私なんの病気なの」と言うから、「白血病や」と言ったら「ふううん、もう治ったん」と言うから、治ってないとも言えないし、「よう寝たら楽になるから、よう寝たらいいぞ」と言って、「大丈夫だから、よう寝たらいい」と言ったら「うん」と言っていたが、スイカを食べたら、またふうっと寝て、今度は夕方起きて「私、こんなして一日寝とってもいいん」と言うから、「いい、俺が全部するから心配するな」と言ったら「ふーん」と言った。それが亡くなる一日前でした。けど、赤ちゃんみたいな顔をして、むちゃくちゃうれしそうな顔をしているのです。「仏様が迎えに来るから心配するな。仏様の世界に行ったらね、自分でああせないかん、こうせないかんというのもなくなるし、体のしんどいのもなくなって、仏さんの智慧の世界で、輝くような世界に帰って行くから心配するな」と。「仏さんの方が迎えに来るから心配するな」と何遍も言っていた。やっぱりそれ、「はー」と言って、あれ本当になってくるのですよ。だから亡くなる時には、だんだん明るい顔になっていって、そして眠るように亡くなっていきましたね。だから仏法はわからんでも聞いておきなさい。大事なのです。死ぬ時に功徳があるから。

さっき申し上げていたのは、本来、世親菩薩は菩薩だから止観行で覚りを悟ると言うべきなのです。ところが名号のところに如実修行と言う覚りの言葉を持ってきて、しかも、覚りを悟ると言わないで相応すると言っている。だから菩薩道を名号の仏道に転換したところが、この讃嘆門。そう考えたらいい。そこに目を付けたのが曇鸞大師です。だから偉いね、「名号ひとつでいいのだ」と。ここに曇鸞大師が目をつけて、この讃嘆門の註釈が始まるわけです。２１３ページです。終わりから６行目のところ。ここはちゃんと『論の註』と書いていますね。ですから『論註』を指示しているわけです。例えば「『論』に曰く」と書いて『論註』の場合もあるわけです。ところがここは丁寧に「『論の註』に曰わく」と言っている限り、これは曇鸞の『論註』なのだという指示がちゃんとあるということ。それはなぜかということはこれからわかっていきます。

「『論の註』に曰わく、「かの如来の名を称し、かの如来の光明智相のごとく、かの名義のごとく、

実のごとく修行し相応せんと欲うがゆえに」といえりと。

（東聖典２１３、西２１４、島１２－５７）

こう世親菩薩は『浄土論』で言ってくださった。

「**「称彼如来名」とは、**」かの如来の名を称するとは、「**いわく無碍光如来の名を称するなり。**」これが曇鸞の註釈です。ですから、いらんことを言わなくてもいいけど、行の巻の最初のところに、「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり」とあった。あれは、この文章をそのまま取ってきている。曇鸞の、「大行とは無碍光如来の名を称するなり」。これは、曇鸞の讃嘆門のこの文章を取ってきていることになります。いいですね。

言わなくていいけど、また言ってしまうな。「帰命尽十方無碍光如来」というのは、私たちのご本尊になっている。そしてそれを一番最初に言った人は世親です。だから世親のところで、帰命尽十方無碍光如来を言うべきなのだけれども、行の巻の引用のところでわかった通り、世親のところの引用は「我修多羅」からしか引用していなかった。１６７ページ。ここは行の巻で読んだところです。多分もう忘れているでしょう。ここで、なんでこんな変なところから引用するのだと僕が言ったように、「**『浄土論』に曰わく**」とあって、「**我依修多羅　真実功徳想　説願偈総持　与仏教相応**」と、ここからしか引用していない。そうすると一番大切な、「**世尊我一心　帰命尽十方　無碍光如来　願生安楽国**」、これは引用していない。だからそれは、その前のところの龍樹の「弥陀章の偈頌」のところに、「世尊我一心　帰命尽十方　無碍光如来　願生安楽国」を置いて、見て、だから『浄土論』は我修多羅から引用しているのですよと説明しました。それはその通りです。しかし違う視点で考えると、今言ったように、「帰命尽十方無碍光如来」は世親が言ったのです。そして本尊にまでなっているわけです。なぜ世親のところでこれを引用わざわざしなかったのか、逆にそれをすると、帰命尽十方無碍光如来という本尊は菩薩道を貫徹するものだと勘違いされるから、凡夫の名号にならないから、世親のところで引用すると。世親は何と言っても龍樹・天親の菩薩ですから、だから世親が言ったということで、世親のところで帰命尽十方無碍光如来を掲げてしまうと、それは菩薩道を貫徹する名号なのだなと、止観行を貫徹する名号なのだなと、こういうふうに大乗の人たちが誤解してしまうから、あえてここで帰命尽十方無碍光如来を出さずに、「『論の註』に曰わく」と言うように、『論註』の讃嘆門釈のところで帰命尽十方無碍光如来を掲げるわけです。なぜかと言うと、後で読んだらわかります。そこに三不信が出てくるから。名号による機の自覚、凡夫の自覚が曇鸞のところではっきりしてくるからです。

世親の『浄土論』では菩薩道がずっと説かれていて、機の自覚を表す言葉がひとつもないから、だから世親の『浄土論』を皆さん読んでいるわけ、大乗の人たちは。だから世親の『浄土論』を読んでいる人たちは、名号によって止観行が貫徹するのだな、なるほど、名号というのは、これは観仏三昧、仏を観るという方法なのだなと、こういうふうに理解されてしまうために、親鸞はあえて行の巻では名号を出さなかった。あれほど大事な名号をはぶいてしまった。そして讃嘆門釈のところで、今言ったように「『論の註』に曰わく」、ここは『論註』を指示している。曇鸞のところで「「称彼如来名」とは、いわく無碍光如来の名を称するなり」。これは世親の言葉でしょう。帰命尽十方無碍光如来ですね、これを復活させるわけです。ちゃんと曇鸞は「彼の如来の名号を称するというのは、いわく無碍光如来の名を称するなり」。

「**「如彼如来光明智相」とは、仏の光明はこれ智慧の相なり。この光明、十方世界を照らすに障碍あることなし。よく十方衆生の無明の黒闇を除く。**」　すばらしいね。

「**日月珠光のただ室穴の中の闇を破するがごときにはあらざるなり。**」

つまり、「かの如来の光明智相のごとく」というのは、これは如来の光明が世界中を照らして、障りが少しもない、月や太陽の光は鏡に跳ね返されるけども、人間の無明の闇にまで届いてくださって、そして私たちが死ぬまで我が抜けないということまで照らし出してくださって、名号こそ真実だと頭を下げさせてくれる。これが「光明智相のごとく」ということですよと。わかりますね、言っていることは。南無阿弥陀仏と頭を下げた時に、なぜ頭が下がるかというと、これは頭を下げたのではない、頭が下がる。それは今まで偉そうに生きてきて、自分が正しいと思って生きて来たけど、全部人に支えられていた。そして全部「自分が、自分が」と言っていることが妄想、自分の勝手な思いで、よく考えたら、主人からよくしてもらっていたとか、嫌いな友達でも自分を支えてくれていた。そういうことがよくわかる。だから「私が、私が」と言ってきたそういう無明の闇にまで光が届いて、知らないうちに頭が下がる。「日月珠光のただ室穴の中の闇を破するがごときにはあらざるなり」。太陽や月の光よりも優れている。無明の闇にまで届いてくださる。これが光明智相と世親が言って下さったことですよ。立派でしょう、曇鸞。これ僕がさっき、この世親の文章を読んでも何のことかよくわからないでしょう。「光明智相の如く、名義のごとく」って、何のことやと。ようわからんわね。だからわからん人が講義をすると、もっとわからんようになるから、言葉上でこうだということを一生懸命言うから、意味がわかりません。そうではなくて、今言ったように、「名号に帰する」という事実を言っているわけです。その時には凡夫であったということがばねになって、初めて仏さんの世界に目を開くのだから、「私が、私が」と言ってきたことが、どれだけ恥ずかしかったかと思ったとたんに、頭の方が下がったと、こう言っている。それは南無阿弥陀仏の仏の智慧は、太陽や月の光に勝っているのだ。そしてここから、

「**「如彼名義欲如実修行相応」とは、**」　「かの名義の如く、実の如く修行し相応せんと欲うがゆえに」と、こういうふうに世親がおっしゃってくださっているのは、

「**かの無碍光如来の名号よく衆生の一切の無明を破す**」、今言った、凡夫であるということを徹底的に照らし出してくださった。そして、

「**よく衆生の一切の志願を満てたまう。**」　初めて「自分が」ということを超えて、このいのちの向かう方向、私のいのちは浄土に向かっていた。無明が破れないと、私たちは金や地位や名誉や、それからこの世に見えること、男性だったらちょっときれいな女性、女性だったらちょっとイケメンのお兄ちゃんが通るとすぐ見るでしょう。そういうものを私たちは求めていると思っている。そう思っている。ところが仏さまの智慧に照らされて「我」というものが徹底的に照らし出されて頭が下がると、残るのはいのちだけ。南無阿弥陀仏のいのちだけ。いのちは浄土に向かっている。浄土に向かっているという言葉がいやだったら、比べなくていいものになりたい。自由になりたい。私が私だと言いたい。それが私たちの志願です。無明が徹底的に破られた時に、初めて自分が願っているものが何かということがわかった。それは、ひとことで言えば浄土に生まれたい。それをもうちょっとわかるように言うと、比べる必要のない者になりたい。比べる必要がないということは、私は私でよかったのだと。この丸ごと私自身でありましたと、自分の人生に手を合わせていけるような者になっていくこと、それが私たちの本当の命の願いだということがわかった。だから無明が破られるということと、私たちが本当に何を願っているかということがはっきりする。それが法蔵菩薩の如実修行に相応して、名義に相応するということだと。名義というのは凡夫を救いたい、そしてもうちょっと言うと、比べる必要のない者にしたい。「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色

白光」(『阿弥陀経』)、それを救いにしたい。世界中の人が凡夫であっても、それによって救われるのだと。それが法蔵菩薩の名義です。そうすると私たちの命は、そういうことを願っていたのだということがはっきりした。だから「かの無碍光如来の名号よく衆生の一切の無明を破り。よく衆生の一切の志願を満てたもう」。これも大行釈のところのはたらきに親鸞がそのまま引用している。わかるね。そうすると親鸞が名号は信心に立つというのは、曇鸞の讃嘆門釈に立っている。大行釈そのままだから。大行釈もそのままだし、その大行釈のあとの名号のはたらきもそのままね。いいですか、みんな勉強してきたところです。わかっていますか。

１５７ページ、ここに行の巻が始まりますね。

「**謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。**」当然ですね。そしてここから、

「**大行とは、すなわち無碍光如来の名**（みな）**を称するなり。**」（西１４１、島１２－６）

これは、さっきあった曇鸞の讃嘆門釈の文章そのままです。いいですね。そして、その大行のはたらきが、親鸞の言葉でまとめられます。それは４ページ後、１６１ページ、大行のはたらきはどんなはたらきをするか、これは親鸞の御自釈です。自分の文章です。しかし自分の文章だけど、これは完全に曇鸞のさっきの文章です。

「**しかれば名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまう。**」わかりますね、これは完全に曇鸞のさっきの文章でしょう。そうすると親鸞が立った大行、そして親鸞が大行のはたらきをいただいた曇鸞そのままでしょう。だから帰命尽十方無碍光如来を世親のところで受け止めるのではなくて、曇鸞のところで親鸞は帰命尽十方無碍光如来という名号を受け止めた。大行はそこでとらえた。そうですね。僕が説明するのではなくて、そうなっている。なぜかと言うと、さっき言ったように、世親の帰命尽十方無碍光如来という言葉で表すと、世親の『浄土論』は機の自覚、凡夫の自覚は一切出てこないために、菩薩道の見仏、名号を称えて仏を観るという、そういう方法なのだと勘違いされるために、親鸞は世親のところで、帰命尽十方無碍光如来をあえて省いて、曇鸞の「『論の註』に曰わく」と、今読んでいるとこで、帰命尽十方無碍光如来を大行としていただいたということが行の巻と照らし合わせてみればよくわかるでしょう。はたらきまで曇鸞が言った通りに書かれている。いいね。もう寝る奴は欠点だ。(笑)

それで、「よく衆生の一切の志願を満てたまう。」(東聖典２１３)、ここまではいいのですが、この後に、「**しかるに称名憶念あれども、**」というふうに曇鸞の場合には機に移っていきます。問題が機、自分自身の身に移っていきます。だから名号を称えるというのは菩薩になることではなくて、

「**しかるに称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざるはいかんとならば、**」

確かに「私が」という「我」が地獄を作っていると教えられたと。しかしよくよく自分の身を考えてみると、その無明が消えたわけではないと。死ぬまで消えないと。だから「しかるに称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざるはいかんとならば」、つまり、いつまでたっても「私が」という根性が抜けずに、気が付いたら金の計算しているわ、人の悪口を言っとるわ。せっかくこの円徳寺で仏教を聞いたけど、門を出たとたんに父ちゃんの顔を思い出して腹が立つ。この根性はどうしても抜けないと言うわけです。それは何でやろうというと、

「**実のごとく修行せざると、名義と相応せざるに由るがゆえなり。**」

法蔵菩薩のように覚りを悟ったわけでもないし、だからと言って、名義に相応する、つまり法蔵菩薩の覚りに相応するということの体験を持ったけれども、いつまでたってもこの無明が消えなくて抜けない。これはどうしてか。

「**いかんが不如実修行と名義不相応とする。**」　どうしてこんなことが起こるのか、

「**いわく如来はこれ実相の身なり、これ物の為の身なりと知らざるなり。**」

要するに、阿弥陀如来が覚りの身である。そして、その覚りの身だけじゃなくて、その覚りを命を捨てて私たちを救いたい。「物の為」というのは衆生のため。物というのは物（ぶつ）じゃないよ、私たちのこと。私たちのために身を捨ててくださった仏様なのだということを知らないからだ。

これもいい、よく考えてごらん。私がよく申し上げるように、阿弥陀如来というのは特別な仏さんよと。普通の仏さんはいっぱいおる。例えば龍樹だったら百七仏で、百七の仏さんを褒めています。その仏さんはみんな「四弘誓願」という願いは持っている。だから四弘誓願というのは、あれはどの仏さんにも共通だから、どの宗派も四弘誓願を称える。大谷大学も入学式の時に、あの四弘誓願を男性合唱団が歌います。そんなふうに四弘誓願はどの仏さんでも持っています。ところが阿弥陀さんだけ、四十八も本願があるのは。それは何でかというと、自利利他の本願だけで私たちが救われないからです。凡夫を救おうとして一生懸命凡夫を見たのが阿弥陀さんなのです。そうすると「幸せになりなさいよ」と、例えば子供だったら、自分の娘に「幸せになりなさいよ」と、こう言う。しかしそれだけじゃなくて、幸せになるためには、まず、いい大学を出ておきなさいとか、いい男を見つけなさいとか、そうやってどんどん願いが展開するね。と同じように、凡夫を救うために四十八も本願を持っている仏様は阿弥陀如来だけです。それを知らないというのです。「物の為の身」、つまり阿弥陀如来はそのために自分の身を捨てたのだと。五劫もの間思惟し、十劫も修行をして、最後にはあなたたち一人一人の命にまでなって身を捨てたのだと。そういう仏さまだということを知らないからだと。こう言っているのです。その通りですね。

私たちは仏さんのことなんかほとんど思わない、普通は。金のことやら、喧嘩ばっかりして、馬鹿たれが戦争ばっかりして、何とかならんかと思うね。あいつら本当に報恩講に呼んでやらんといかん。なさけない。だけどあれが私たちの実相です。だからあれを助けようとしたのです。だから「地獄、餓鬼、畜生がない国にしたい」。まずここから始まる。そのためには、生きている間だけではなくて、浄土に生まれて、もし死んだとしても地獄、餓鬼、畜生がないように。訳のわからない誓いです、これは。それは逆に言えば、人間が生まれ代わり死に代わりするたびに、ずっと戦争と自殺をやってきた。それをどうやって救うかと言っているわけです。そして浄土に生まれたらみんな金色になるように。訳のわからん本願だけど、それは、お前たちは肌の色の違いで殺し合いをしているではないかと言っているわけです。そんなふうに仏様の本願は地獄・餓鬼・畜生がない、比べなくてもいい世界に生まれてほしい。いくら言ってもわからんから、もういいと、お前たちお手上げだ、俺は命を捨てると言って、最後にはみなさん一人一人の命にまでなったのが阿弥陀さんなのです。それが「物の為の身」。説明したらそういうことになります。

それを身で知らないからです。その通りですね。知らないということは我を立てるということです、反対に。そうやって生きているのが私たちなのですというふうに、曇鸞はいったん仏様に帰命しているのですが、帰命したところから、今度は逆に自分の身の愚かさをずっと表明していく。これが曇鸞大師の偉いところです。偉い。こんなことはなかなかできない。だから曇鸞大師はいったん帰命したにもかかわらず、自分の身はどうしてもそうならないのだと。情けないと言って、ここから「不如実修行と名義不相応」、そして仏様が覚りの身だということを知らないのと同時に、私たちのために身を捨てた仏様なのだということも知らない。そしてそれを知らない心の中に、三つの不相応がある。「**一つには信心淳**（あつ）**からず、存せるがごとし、亡ぜるがごときのゆえに。**」

まず信心は淳（あつ）い心、私たちに淳い心がないから、だから信心があるように思う時もある。円徳寺に来て話を聞いていると「そう、そう」と思って、「私も西藤さんよりましだ、わかっている」（笑）と思って、「私はやっぱり信心があるからや」と。「西藤さんは、わけのわからんことばっかり言って、あれは信心がないからだ」というようなところが時々ある。（笑）ところが、夜寝ている間に忘れてしまって、「あかん、西藤さんといっしょだ」と、（笑）こう思う時もある。だから信心があるような、ないような、よくわからないというのがこの身の事実です。曇鸞偉いでしょう。わかる人もわからない人も包んでいくのです。こうやってね。

そしてまた信心がひとつ、２１４ページの２行目のところ、

「また三種の不相応あり、ひとつには信心淳からず、存せるがごとし、亡せるがごときのゆえに。二つには信心一ならず、決定なきがゆえに。」

決定しない。いつもふわふわしてわかったような、わからんような気がする。わかったと思ってもいつの間にわからないようになる。というふうに決定がない。「**三つには信心相続せず、**」今言ったように、一晩寝たら忘れる。昨日は何か信心があると思って感動したんだけど、夜寝て次の日起きたら、何やらようわからんようになっていて、決定がないし、相続しない。

「また念相続せざるがゆえに決定の信を得ず、決定の信を得ざるがゆえに心淳からざるべし。これと相違せる」、つまり、我が身はいつまでたっても自分を主張して、そしてこの身は信心と言ってもあるようなないような、よくわからない、決定しない。そしてずっと相続しない。

「これと相違せるを「如実修行相応」と名づく。」　この身が凡夫であると、こういうことだけけれども、それと相違せるというのが、法蔵菩薩の修行が確かにその通りでありましたと。こちらが凡夫になりきって、僕らは凡夫になりきらないで、中途半端な凡夫になります。酒を飲んだ時だけ「凡夫だから」とかね。中途半端な言い訳をするときだけ凡夫になるけれども、徹底的に凡夫になり切った時に初めて「如実修行と相応する」と、こういうことが起こるのだと。

「**このゆえに論主建**（はじ）**めに**」、建めにというのは、『浄土論』の最初に「世尊我一心」と述べてくれたのだと。だからこの「我一心」とこう言うのは、これは私たちの身と相違している心、この身を超えている心。凡夫の身をむしろ率い、浄土に向かわせ、浄土に率い、浄土に向かわせていくような私たちを超えた心、それを「我一心」と言っているのだと。これが曇鸞大師の讃嘆門の註釈になります。

そうすると私が何度も申し上げてきましたが、七祖は全部名号を明らかにしているという点ではそうです。そうだけれども、教学の流れから見ると龍樹は確かに、「停弱怯劣（にょうにゃくこれつ）」「怯弱下劣（こじゃくげれつ）」（『十住毘婆沙論』）とかというふうに凡夫の身を明らかにしているような言葉が出てきます。しかしあれは、龍樹の『十住毘婆沙論』を正直に読むと名号によっていただいた機の自覚というのではなくて、菩薩道を全うできない、菩薩道から転落した人のこと。そうするとあれは直接的には、名号による機の自覚かどうかよくわからない。表向きには。ただ親鸞聖人は曇鸞の目を通して読むと「名号の信心の自覚です」と、こういうふうに親鸞は読みました。読んだけれども、表向きに機の自覚を表すのは、曇鸞のこの讃嘆門が初めて。「名号によって不淳、不一、不相続、この身と相違せる他力の信心を「世尊我一心」とおしゃってくださったというふうに、南無阿弥陀仏に帰したときに、「凡夫として帰するのです」というふうに明確に七祖の中で初めて宣言した人は曇鸞の讃嘆門だと思ってください。ですから親鸞は、曇鸞の讃嘆門のところで「帰命尽十方無碍光如来」を復活させて、そこで名号を立てます。世親のところで立てない。それは先

ほど申し上げた理由によります。引用を見たらそうなっているからです。僕の勝手な意見ではありません。まだいっぱいあります。言い出したら、教養があるからいっぱい知っているけど、（笑）君らはそれを言い出すと寝るから、だから今申し上げたことが筋です、筋。親鸞の視点として今申しあげたことが筋です。ですからここが、初めて「名号に帰する」と言うときに、「この身は凡夫だ」ということを明確に曇鸞は教えてくださった。それがさっき言った、前のところの経典では「我が善き親友」と教主世尊が褒めてくれるというのは、凡夫が覚りを悟ったというのではなくて、「凡夫になり切った」ということよ、というふうに前の経典の真の仏弟子のところにあることを明確にしている。

そしてこの後は、もう時間がないけども、読んだらすぐわかります。同じ曇鸞が、いいですね。『論註』を書いた同じ曇鸞が、『讃阿弥陀仏偈』というのは、これは曇鸞の『大経』の賛歌ですから、だからその同じ曇鸞がこのように言っていますということを指示するために、

「**曇鸞和尚造なり**」と、実に正確でしょう。さっきの曇鸞が「こう言うのよ」とこう言って、

「**あらゆるもの阿弥陀の徳号を聞きて、信心歓喜して聞くところを慶ばんこと、いまし一念におよぶまでせん。至心の者回向したまえり。生まれんと願ずれば、みな往くことを得しむ。ただ五逆と謗正法とをば除く。かるがゆえに我頂礼して往生を願ず、と。已上**」

わかりますね。これはどう見ても第十八願の本願の成就文でしょう。それを曇鸞は自分の言葉に直して、『讃阿弥陀仏偈』の中で、こんなふうに阿弥陀を褒めてうたっているのよと。さっき凡夫だと言った同じ曇鸞が、本願の成就というのは実は、「凡夫として本願が成就する」のよと、それが真宗の核心なのよと、わかってて ね、ということを言うためにきちっと押さえている。わかりますね。

これは大乗仏教に捧げているのだから、菩薩道の人たちでもわかるように丁寧に言っているわけです。だから本願の成就と言うと、下手をすると本願が成就したと言っているのに、聖道門の人たちは、念仏というのは、聞名か、見仏か、どっちとも仏を観るという方法でも念仏をとなえるのだから。比叡山の担い堂がそうでしょう。あれは『法華経』の御堂と『大経』の御堂が廊下で結ばれていて担い堂と言う。あそこで修行をしているのは仏を観るための修行。そのために「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏・・」と言って、となえて回っているわけだから、南無阿弥陀仏という称名念仏は、私たちが言う本願の名号だけではなくて、仏を観るための行の方が一般的なわけです。多いい、多数決でいったら。だからそういう人たちに言っているわけだから、本願の成就というは仏を観るということではなくて、凡夫として、はじめて仏様の本願を頂くということ、同じ曇鸞が本願の成就を言っているでしょうと。凡夫としてこの身は死ぬまで抜けないのだと言った曇鸞が、本願の成就をこんな言葉でおっしゃっていますよ。だから本願の成就というのは経典に言うように、「教主世尊なほめたもう」「我がよき（机をたたく）親友ぞ」と褒めてくれる。凡夫の身を持った者が、曇鸞が本願の成就というのは仏を観るのではない、「本願が成就した」、「私たちの志願が満たされる」。こういう本願に帰するということが、本願の成就ということの内容ですよと、いうことを曇鸞のこの讃嘆門のところで親鸞がきちっと押さえて、ここから展開していくということになります。

そうすると、もう時間がないけど、今日言ったように三不信、曇鸞から始まる。この後、善導の三心釈が始まっている。だから三不信、三心釈、これは機の方の問題。こっちから言えば、至心・信楽・欲生、淳心・一心・相続心というふうに法になる。だから、親鸞は三不信から始まって、三心釈を助走にして、そして三一問答に入っていく。ということは、逆に言えば、私が言っているよ

うに、道綽の三不三信の誨が背景にあるから、こういう配置になっているとしか思えない。道綽の三不三信の通りでしょう。三不信と『観経』の三心、そして機の方の問題はそういうこと。そういう身であって、初めて涅槃の覚りを頂くのですよと。これが三一問答ですから、だから三一問答に行くまでに、この機は凡夫であること、そして、曇鸞大師はそれを三不信と言った。善導大師は『観経』の三心釈、これを言った。特に二種深信が大事ですね。それを言ったというふうに、「涅槃の覚りが開かれるのは凡夫なのだ」ということを徹底するために、三不信と善導大師の三心釈を置いて、そしてさっき言ったように源信の文章を置いて、三一問答が始まります。そういう展開になっているというのが信の巻になります。ですから逆に言えば、道綽の三不三信の誨が裏にある。ということがよくわかる。こういうことになります。

丁度時間となりました。これから次は三心釈、長いからね、だから三心釈のところをずっと読んでいきますが、今日申し上げたことを忘れないでください。いいね。だから逆に言えば、三不三信の誨があるから、こういう配置になっているわけです。僕が言うのは間違いではないというふうに思いますよ。何か質問があればどうぞ。

質疑応答

田畑先生・・それでは質問の時間にしたいと思います。先ほど先生が覚えておきなさいと言ったことは講義録で何回も読めるようしたいと思いますので、よろしくお願いします。それでは垣本さんお願いします。

先生・・年いってるから講義録も最近読めないようになってきた、目が悪くなって。

質問者 1・・先生、三不三信の誨というのは道綽から善導への師資相承とか、よく教えていただいて「ああそうか」と、深い内容だなと、ありがとうございました。そしてあの「正信偈」の三不三信というのをこれから大事に読ませていただきたいと思います。

そして、これちょっと先回の講義を欠席して録音で聞かせていただいたのですが、立脚地ということをおっしゃいました。そして、そう言えば法然上人の引用も『教行信証』ではほとんどないし、それと同じように道綽というのはあまり近しいので、ないというふうにお聞かせいただきました。それでですね、何か、私は普通論文とか読む時には、やはり大事なとこはたくさん書くというのか、でそういうふうに見たら、『教行信証』なんかも阿闍世の物語とか化身土末巻とかはすごく量が多いですね。そこのとこの具合が、ちょっと私の中で飲み込めないのです。どういうふうに考えたらよろしいでしょうか。

先生・・化身土の末巻は、これもまた一回ちょっと皆さんに、どうしても原稿にしておいてほしい、

今まで誰も言っていないところですが、今日は質問にだけ答えておきますが、化身土の末巻は、化身土の本巻は、ともかく化身土というのは自力の批判の巻である。そういうことですね。その自力の批判をするときに、簡単に言います、親鸞が自分の感覚で批判したら批判になりません。だから化身土は本巻も末巻も全部「教誡」。こういう言葉が本巻にも一回、末巻にも一回、末巻の最初に出てきます。この教誡という言葉は、『大経』の三毒五悪段に出てくる言葉です。そこまで、今日は言っておきます。ですから、化身土は、お釈迦様の三毒五悪段の教えを聞きながら自力を批判している巻である。これが基本です。そして本巻は仏道についての批判ですから、聖道門についての批判になっています。本巻はね。末巻は、私たちの一般の思想。みなさん今どう、合理的な考え方、あるいは科学的な考え方、だから末巻には、星座とか、それは科学です。科学とか、それから、一般の思想、例えば『論語』が出てきます。当時の思想の中心は『論語』ですね。だから『論語』も出てくる。そういうふうに末巻は、今の私たちが生活している時に、拠り所としている思想がずっと出てくるから、科学からずっと、科学、経済、政治、それからずっと中国の思想まで出てくるから長くなっている。別にあそこを長くしようと思ったわけではないけど、結局、結果的に長くなったのだと思います。それでもうひとつは何でしたか。

質問者 1・・長く書くということは、やっぱり重要だから長く書くのではないかと思うのです。

先生・・そうです。

質問者 1・・そうしたら、先生がおっしゃったように、法然のとことか、道綽のことについては触れないと。立脚地と言うのに、だからそこのところが。

先生・・道綽は、触れないではなくて、三不三信の誨については触れてませんけれども、七祖の引用のところでは、道綽をちゃんと引用していますよ。それも僕は説明しましたが、道綽の引用のところ、行の巻の引用のところを見ると全部念仏三昧で統一されています。念仏三昧と言うと、これは称名念仏なのか、仏を観る観仏三昧なのか区別がつかない。だけど道綽はちょうど聖道門から浄土門に移る時の祖師だから、どっちも包むために、観仏三昧も包んで、「みなさん仏を観るために修行しているでしょう。いくら修行しても難しいよ」と。「これ念仏なのよ」と本当は言いたいのだけども、それを包むためにわざわざ念仏三昧になっています。帰って見てごらん、道綽の文章は、行の巻の引用は長いよ、全部念仏三昧です。ですから、法然の教えをそのまま受けている親鸞は。法然はこう言います。「道綽は中国で、聖道門から浄土門を独立させた祖師である」。そうですね。聖道、浄土を分けたのだから。そういうことですね。だから、道綽は聖道門から浄土門を分けた人として、とても大事なのだと。ところが聖道門も包むために念仏三昧という形で念仏を統一している。親鸞の引用を見たら全部そうなっている。ところが善導大師になったとたんに称名念仏になります。ですから善導大師は皆さん知っているように、六字釈を中心にして、そして善導の、つまり『観経』の教学を完成させた人。というふうに法然が親鸞に教えるわけです、法然門下で。法然の講義を見たらそうなっている。だから道綽は独立させた人、善導は『観経』の講義を完成させた人として親鸞もちゃんと引用してますから、僕が今日、「道綽はないよ」と言っているのは、三不三信の誨について道綽のところはありません。だけど道綽をたくさん引用していますから、そこは間

違えないようにしてください。

質問者 1・・法然上人もあまり引用、

先生・・いやいや法然はもう道綽と善導の講義で一辺倒です。だって善導によって回心した人だから、道綽、善導一辺倒。だから道綽の講義と善導の講義で満たされていく。わかりますね。ところが親鸞が偉いのは、それを聞いていた親鸞は、例えば、『観経弥陀経集註』というものがあって、親鸞が法然門下のノートだと言われています。これは親鸞の直筆だから、私たちが博士課程の時くらいに国宝になりました。つまり親鸞の直筆ね。それを見ると、道綽と善導の講義で埋められていくのだけども、五念門でずっと了解していく。つまり法然の『観経』の講義を聞きながら、『大経』で了解しようとしているのです、親鸞は。だから五念門、これは『論』、『論註』が五念門でしょう。『大経』でしょう。だから親鸞は若い時から、法然門下にあった時から、法然は完全に『観経』の講義をしている。そして道綽と善導の講義をしている。それを聞いていた親鸞は、全部『大経』で読み直している。だから僕は言っているでしょう、「あの人は若い時から『大経』の専門家だった」と。

それと阿闍世が長いのは、今日申し上げたことと関係するので申し上げますが、真の仏弟子釈が終わります。そうしたら、なぜか、皆さんよく知っている「悲歎述懐」の文章が置かれます。悲歎述懐、わかりますね。

「誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快（たの）**しまざることを、恥ずべし、傷むべし、と。」**（東聖典２５１、西２６６、１２－９３）

なぜそんなところにね、せっかく真の仏弟子と言ってきているのに、一番最後に何でそんなものを置くのかと思うのが普通です。それが今日言ったことと関係して、真の仏弟子と言うと、みんな八地以上の菩薩だと勘違いするから、だから『大経』の真の仏弟子は、こういう悲歎述懐をするものなのよと言うところで、真の仏弟子が終わっていって、その後、曇鸞の五逆誹謗正法と阿闍世の物語がずっと出てくる。だから真の仏弟子というのは、五逆誹謗正法という者、そして阿闍世のような者、それが悲歎述懐というところから展開していく。だから、『教行信証』は真の仏弟子というのは八地以上の菩薩だと言われるのが普通だから、悲歎述懐をわざわざ置いて、その後に五逆誹謗正法と阿闍世の文章を長く引用して信の巻が終わっていく。だから、あそこが『歎異抄』で言うと悪人正機に当たるところです。わかるね。悪人正機という言葉は、親鸞は『教行信証』で一度も使わない。あれは『歎異抄』の唯円の言葉です。だけど悪人正機の内容は、五逆誹謗正法とそれから一闡提です。それがずっと真の仏弟子の展開、最後の結びとして出てくるということは、真の仏弟子というのは、今日言ったように菩薩じゃないよ。凡夫なのだということを言うために阿闍世の問題が出てきます。

質問者 1・・ありがとうございました。何か経典をすごく浅く読んでいるなということがわかりました。ありがとうございました。

先生・・そうなっていますから、僕の解説じゃなくて、そうなっているから、そういうことです。

質問者2・・どうもありがとうございました。ふたつお尋ねしたいと思います。ひとつは前回のお話の最初に、奥様のことについてお話をされる時に、宿業というお話をなさったと思うのですが、あのお話は非常に感銘深く拝聴いたしました。それで宿業というものについて、宿業というものはいじくりまわすものではなくて、合掌するものだというか、言葉にすればそういうことになります。その宿業というものを、ものの見方ができること事態が智慧であり叡智であり、いのちである。

先生・・だから宿業ということを言ったら、それが救いになります。

質問者2・・そうですね。そういうふうにうかがいました。それで間違いないでしょうか。

先生・・ありません。その通り。もうひとつ言っておきます。『教行信証』で宿業という言葉は出てきません。一度も出てこない。『歎異抄』だけです。ですから、あの宿業という言葉も、唯円の言葉だと知っておいてください。基本的に。覚如がよく使います。だから覚如は、あれは唯円の弟子だったのです。覚如は唯円に遇っている。そして、この人はものすごい人だと言って褒めています。『慕帰絵詞』の中でね。だから覚如は唯円について勉強している。だから唯円の弟子だと思う。だから宿業という言葉は覚如のところで復活されるけれども、宿業という言葉は『教行信証』に一回も出てこないということは知っておいてください。『教行信証』で言えば無碍道です。無碍の一道、それが宿業の内容になります。

質問者2・・宿業という言葉を、本当に自分のものとして持ち得ることが大変重要なことだというふうに思いました。

先生・・その通りです。はい、その通り。

質問者2・・質問です。もうひとつは、先程ちょっと口走りましたら、それはちょっと質問としてはなかなか難しいという話がありまして、五念門の凡夫の仏法というものに対して、五念門の行というものでもって親鸞は考えておられるわけですね。その時に、讃嘆というものが非常に特別な役割、を果たしているように、先生のお話からもうかがえるような気がしたのです。それは私の思い間違いでなければ、例えば『末燈鈔』などを読んでみますと、ここに「自然法爾章」というのがあるわけですね。最後には「**浄土宗のひとは愚者になりて往生す**」（『末燈鈔』東聖典６０３、西７７１、２１－６）というふうに書かれていて、それに至るまでに、この自然ということについては、自己の我を、そうは書いてないですが、自己の我を懺悔するというか、相対化することによって如来の世界というものに、まあ、いわば、そのまま如来の世界を、言葉にしにくいのですが、そのまま褒めたたえるということ、それは自然ということで、しかし、それが讃嘆の内容になっていると思われるのです。だから、親鸞においては五念門の讃嘆というのは、この自然ということを内容としているのではないかと思うのですが。

先生・・整理をしますね。親鸞が自然というふうに使う時には、みなさん自然だというと、何か「あるがまま」とか、「そのままでいい」とか、そんなふうな印象になるでしょう。そういう使い方は

法然の名前の自然です。法に自然、これは、あるまま、そのままでいいのだという意味で自然ということを言うのですが、親鸞の場合は全部読むとよろしい、今の「自然法爾章」もそうですけども、親鸞が言う自然は、完全に「願力自然」です。「本願のはたらきによって、自然に往生するから、愚者のはからいはいらない。本願に任せなさい」と。こういう意味で自然と使うのです。そういう場合は完全に「願力自然」という意味で親鸞は使う。ですから、おっしゃるように「名号に帰す」と言うときには、信心。名号に帰するのですから当然信心が起こる。その信心の内容として言えば、「願力自然に帰す」という事だから、だから讃嘆門は自然と関係していると、こうおっしゃっているように聞こえますが、その通りです。その通りだけど、今言ったところをずうっと埋める論文を５０枚書きなさい。（笑）みんなを納得させるためには、自然とそれから讃嘆門というテーマが二つ、これを繋ぐのは難しい。どうやって繋ぐかね。それを５０枚くらいの論文で繋げれば、繋がっていると思います。ただ今言うように、自然と讃嘆門ですと言われても何のことかわからない。繋ぐあれがないから、

質問者2・・あの、論文を書こうとは思わないのですが、（笑）

先生・・お気持ちとしてはわかります。お気持ちとしてわかるけれども、人を説得する場合には、やっぱりその間をうめないと、

質問者2・・先生を説得しようとは夢にも思わないのですが、しかし讃嘆ということと自然ということは本質的に、この場合イコールのことではないかと思われるということがあるのですね。

先生・・まったく間違いではないので、三段階くらい踏むとイコールになるでしょう。もし、親鸞の通り言うのなら、讃嘆門と直結するのは懺悔です。讃嘆と懺悔、これは直結します。

質問者2・・懺悔が成り立たないと讃嘆がなりたたない。

先生・・そうです。だからこれは僕は勝手なことを言っているのではないよ。それにまた言いだすと時間がかかるから、『往生礼讃』ね。善導大師の『往生礼讃』。『往生礼讃』の「礼讃」はこう書くわけです。それを引く時に、『集諸経礼懺儀』（しゅうしょきょうらいさんぎ：二巻、唐の智昇の著）を持ってきます、親鸞は。それは同じ礼讃でも、讃嘆と懺悔。わざわざ親鸞が『往生礼讃』を引くときに、なぜ『集諸経礼懺儀』を持ってくるかというと、「讃嘆は懺悔だ」ということを押さえるためです。ですから『集諸経礼懺儀』には、機の深信、特に信心、機の自覚のところがわざわざ付け足されているから、それを引用してきます。その場合には、懺悔と讃嘆。これは直結しているけども、讃嘆と自然が直結しているとは親鸞どこにも言ってませんので、それを繋ぐには少し、

質問者2・・ありがとうございました。

先生・・はい。そういうことです。

質問者3・・あの、先生に反発するようですけど、私たちの細川先生が『晩年の親鸞』という本の中に書いていらっしゃるのは、最後は「信力増上」と「宿業の諦観」ということを言っているのです。これは細川先生の個人の考え方なのでしょうか。親鸞聖人は宿業ということをおっしゃらなかったって。

先生・・親鸞聖人がおっしゃってなくても、『歎異抄』にはよく宿業が出てきますね。そして宿業の、細川先生がおっしゃるように、宿業ということを知ること、それが救いです。だから最後にそうおっしゃったというのは、その通りです。どこも間違っていません。その通りです。

　ですから、『歎異抄』で宿業ということと無碍道ということがひとつになっているから、紙の裏表になっている。宿業ということがわかるということは無碍道に立つということです。そう考えた方がよくわかる。今まで宿業というと、これはまあ、もう文章にしないでほしいのですが、宿業を説明するためにいろんな工夫をしてきたわけです。その中にいろんなこと解説をする、その中に要するに、部落の差別のことを言ったりするものだから、そういうことが起こってきた。それは宿業ということを解説してしまうから、「宿業というのは自覚語」だから、自分が救われるか救われないかという「自覚語」です。それを世間語に戻して解説するのは、それなりの意味があるけれども、それはそれなりのリスクを冒すということを知っておかないといけなかった。それを反省していない、これまでね。だから宿業というのは自覚語。救われたという感動です。

質問者3・・それで細川先生がですね、この本を出したけど、何の反応もなかったとすごく残念がったのを覚えています。

先生・・いや、それは細川先生が最後にそういうふうにおっしゃったというのは、僕は素晴らしいことだと思いますよ。どこも反発でも何でもありません。僕もそう思います。

質問者3・・はい、ありがとうございました。

質問者4・・先生あのう、また余計なことを言って怒られるかもしれませんが、宿業というのは、私も意味がわかって、先生が救いと言うのはわかる気がするのです。それで、一回この会で申し上げましたけど、仏教で宿業という言葉が一番慈愛に満ちた言葉だというふうに思っています。だけど先生、この中に三分の一くらいですね、宿業というのを宿命とか運命とかと混同して考えている人はですね、「どうせ、これが俺の宿命やから」とか、「どうせ、これが俺の宿業だから」と考えると、とても救いに思えないと思うので、はなはだ余計なお世話ですけど、もう少し宿業の意味を説明してください。

先生・・だから説明する必要がないんだ。これから言っておく西藤、お前人を代表して質問するな、お前が質問しなさい。お前が質問したいことを本気で聞きなさい。人のことを代弁するような質問をするな。それはスタンドプレーと言うのだ。すぐ人の代弁をして、なんか自分がみんなを代表しているような質問をする。お前が聞きたいことを本気で聞きなさい。それが質問というものです。お前は宿業がわかっていると言うんだから、それでいいじゃないか。それ以上解説するとややこし

いことになるから、宿業ということを解説すると。

だから、宿業というの自覚語。救われるかどうか、その最終的に救われた者が、自分の身を宿業の身だと。悪人が広がりを持ったのが宿業です。時間と空間の広がりを持ったのが宿業です。それは基本的には悪人の自覚です。愚の自覚ね。それが時間的にも私一人じゃないんだと。永遠の時間愚かだった。こういう時間と、それから私一人じゃないんだ。もう人類始まって以来みんな戦争と自殺で苦しんでいる。というふうに、悪人という個人の自覚が時間と空間で広がりを持った言葉、それが宿業だと考えてください。だから悪人正機、宿業正機です。悪人こそ救われる。宿業の身の自覚こそ救われる。だから、自覚語だから、それを時間的にあつかうから、こういうふうにして、俺たちは生まれつきこうなったのだ、みたいな解説をするから、ややこしいことになってくる。だから、それは解説をする言葉ではないから、あえてやりません。と言うことになります。

田畑先生・・はい、丁度時間になりましたので、一応今日の会はこれで終わりたいと思います。先生どうもありがとうございました。

先生・・ありがとうございました。少し長引いて大変恐縮ですが、もう少ししゃべらして下さい、死ぬまで。田畑先生の金が尽きたら、もういりませんから、よろしくお願いします。（笑）

田畑先生・・ありがとうございました。恩徳讃を最後にお願いします。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏　　（恩徳讃、終了）

テープ起こし、文章化：安達洋太郎さん
添削：田畑正久先生、住職